

今月の聖句

『主イエスは、弟子たちに話した後、天に上げられ、神の右の座に着かれた。』
マルコによる福音書 第16章19節

◎ 5月の予定

- 7日(日) 神奈川私立小学校フォーラム
- 9日(火) 春の遠足
- 11日(木) 歯科検診
- 校内研修会
- 12日(金) 春の遠足予備日・SAの集い
- 16日(火) 授業参観 17日
- 17日(水) 眼科検診
- 18日(木) 心臓病検診(小1・中1)
- 19日(金) 聖書教室
- 23日(火) 評議員会・理事会
- 尿検査
- 24日(水) 転入学願書受付 25日
- 保護者会 26日
- 26日(金)
- 29日(月) 中間試験(中) 30日
- 教職員協議会
- 30日(火) 教育実習 6月24日
- ◎ 6月の予定
- 2日(金) 校内研修会

新入生歓迎会・体力テスト

4月14日に中学校の新入生歓迎会が、4月25日に体力テストが、それぞれ大磯運動公園で行われました。どちらも天候に恵まれ、子どもたちの生き生きとした様子が見られました。



◎ 今月の行事から

○春の遠足 5月9日(火)
新型コロナウイルスの感染症対策が緩和後実施される初めての行事が「遠足」となりました。

小学校は、1・2年生は平塚方面に、3・4年生は藤沢方面に、5・6年生は鎌倉方面に出かけます。低学年の皆さんは仲よく元気に行っていることができるように、また中・高学年の皆さんは自分で考えて行動し、さらに楽しめるように、充実した一日にしたいと思います。

中学校は秦野方面に出かけ、自分の足で歩くことに重きを置いた内容になっています。小学生とは違い、自主的に行動できることを大切にしています。中学生らしい遠足になるように頑張る予定です。

脱コロナとして様々なことが開放的になりそうですが、こんな時だからこそ気を引き締めて出かけたと思います。子どもたちの良い体験となりますよう、また行程が安全に守られますようにお祈りください。

○授業参観・保護者会

今学期も分散の形で行います。各クラスからのお知らせをご確認いただき、参観にお越しください。子どもたちの生活の様子をご覧いただけたらと思います。



子どもを育む環境

校長 佐藤 紀明

学生時代、『遺伝的要素』は「子どもの成長に大きなウェイトを占める」と学びました。オリンピックやプロスポーツなどで活躍するトップアスリートなどは、多くの場合、両親共に国体選手並みに運動能力に長けています。また、早くから習い事をさせても最高到達点上がる訳ではなく、小さい頃から水泳教室に通えば、他の子どもよりも速く泳げるようになるのは当然のことであり、オリンピック選手並みのレベルになれるのかという残念ながら遺伝的要素から可能性は低いようです。勉強についても同じことが言えて、幼稚園の頃から算数を教えれば、小学校入学時には同級生を大きくリードするかも知れませんがそのまま伸び続けて一流の数学者になるかという、必ずしもそうではないということです。しかし、「才能は遺伝子によって決められているから、努力しても無駄：」ということは決してありません。生まれつき不得意でも、努力した分だけ、教育を受けた分だけ能力は必ず伸びることが実証されているからです。遺伝的要素で大切なことは、もともと他人同士、違う個性を持った両親から、生まれたからこそ、生まれた子どもには新たな個性や才能、未知の可能性が与えられているのです。唯一無二、その子だけの『良さ』があります。

小学校や中学校では、「運動が得意」だとか「数学ができる」など、分かりやすい特性が評価されがちです。しかし、これからの長い人生を考えると活躍の機会はこの場面、分野で限りなくあります。本人も意識していない長所や短所、才能や不得手に気がつくのは、一緒に過ごしている保護者や教員になります。だからこそ、私は得意・不得意も含めて子ども達の『個性』を受け入れて、『良さ』に気づき、見守っていくことが大切なのです。遺伝子は変わらないので、遺伝子の情報によって子ども達は情報通りに育っていきます。しかし、子ども達を取り巻く環境や、適切な刺激・教育の有無によって、子ども達の将来は大きく左右されることが知られています。子どもの『環境』については、インドで狼に育てられた少女「アマラとカマラ」の話が有名です。少女達は、四つん這いで這い回り、唸り声をあげ、物を掴むのは手ではなく口で、水は舐めて飲んでいる状態でした。それから人間として教育されましたが、幼児のようにヨチヨチ歩きで、言語も不十分なままでした。この話の信憑性は不明ですが、子どもの成長と環境については、深く考えさせられます。今は、インターネットが急速に普及して、子どもを取り巻く環境も大きく変化しました。情報が早くなった一方で、実体験は欠如しています。「見る」「知る」機会が、とても多くなりましたが、実際に「やってみる」活動は少なく、「やってみた」感覚になっています。

日常生活で、いろいろなことを体験することで『想像力』が生まれてきます。実体験では、良い経験ばかりでなく、予期せぬ問題にも直面します。そのような多様な実体験を通じて子ども達は、経験したことのない事態でも解決策を見出そうとする力、初めて直面する課題に立ち向かう力、つまり『想像力』を手に入れるのです。想像力があれば他者の立場や考えを理解することができます。喜びや悲しみ、怒りなどを感じて今の子ども達に必要な『共感力』を育むことができます。自分自身で手に入れられる幸福には、限りがあると思います。しかし、豊かな『共感力』があれば、誰かの幸せを自分のことのように喜ぶことができ、困っている人に心を寄せて乗り越えることができます。そう考えると、実体験が欠如しているインターネット環境は子ども達には必ずしも良いとは言えません。子どもが小さい頃は、「元氣か」「幸せか」だけが関心ごとだったと思います。それから次第に「何ができるか」「上手くできるか」になり、「こうすればもっと良い」「これをしないとダメだ」と期待や要求が大きくなって、過度な関心ごとになっていないでしょうか。子どもには、家庭と学校のより良い『環境』が大切です。教育は学校だけでなく、家庭と適切な役割分担を果たしながら、相互に連携して成り立っていくものだと考えます。教育活動を多彩で活発にして、学校が子ども達を育む良い『環境』となるよう努めたいです。

前進する一年として

中学校教頭 田中 圭史

新学期、各クラスで新しい生活がスタートしました。子どもたちの成長はいろんな場面で見られるのですが、学年が一つ上がるこの時期、意識がぐんと上がるような気がします。中学1年生は中学生になったという気持ち、また中学2年生と3年生は、上級生・先輩になったという気持ちがそうさせるのでしょうか。中学生の一人ひとりがこの一年をかけている学び、体験してほしいと思います。

古くからある言葉で「三育」をご存じの方も多いと思います。「德育」「知育」「体育」を表す言葉で、多くの学校で目標として掲げられています。本学園ではどのように関わっているでしょうか。

德育は、キリスト教学校として言うまでもなく聖書を学んでいます。聖書が示す真理に触れて、創造主であられる神様を知ること、そして私たち皆が神様の愛をもってお創りになられた被造物であることを知り、お互いが愛し合える関係を築いていくことができれば素晴らしいことだと思います。自分の都合だけを考えていては成り立ちません。自分が愛されている存在だと気づき、あの子もあの人と同じように愛されている存在なのだと気づかせていただきたいと思います。

主に教科学習が担っている知育は、大きな位置を占めています。以前にも書かせていた

だきましたが、決してテストで点を取るためだけのものではありません。必要な知識を得て、それを使いこなして自ら学ぶ力・知恵を養うことが目的であると考えます。学校を卒業しても学び続けていくことができる力（エンジン）をもつことが、これからの社会を生きる彼らに必要です。教科学習は教室の中で完結するものではありません。学校では答えのある問いに向かい、答えを見つける練習をしますが、社会に出たら答えの定まりにくい問いばかりです。答えをつくり出していく力が必要です。

時折キリスト教学校として知識を得るということはどういうことなのだろうかと思ひ巡らします。いま私の考える答えは、「平和な社会をつくり出すため」ということです。先人たちが積み重ねてきた知恵を受け継ぎ、その輝きを失わせてはいけません。子どもたちは教育を受けることでよい将来を“つかむ”力をつけていきます。現代では物質的な豊かさとは本当の豊かさではないと多くの人が気づいています。この“つかむ”という動作は能動的で、自分の将来は手のひらに乗せてもらえるものではなく、選んでつかんでいくもの。その力を養うのが学校です。子ども一人ひとりがもつ良いものを認め、新しいものを身につけていくようにと願っています。そしてその力を養う過程で、どうか他の人を蹴落とすでもなく利用するでもなく、愛をもって接する人になってほしいと願っています。

そして人間は神様がお創りになったというそれだけで尊いものです。神様はすべての人を全く同じにはお創りになられませんでした。顔がそれぞれ違うように体も同様です。運動が得意な子も苦手な子も、神様はそれぞれにお創りになりました。子どもたちが自分の体を理解し、力いっぱい動かすことができるようになってほしいと思います。

現代ではこれらに加えて「食育」も重要な要素です。私たち動物の命は他の生物の命の上に成り立っています。その事実と共に、現代は食卓に届くまでに多くの人の手が加わっていることにも気持ちを向けてほしいと思います。また自分自身を大切にするために必要な栄養の知識を得、食事の楽しみやマナー、人間関係の構築など世界の広がりを経験していくことで生活がとて豊かになるでしょう。

学習や生活面は、できる・できないに焦点が当たりがちです。おもてに表れる部分に捕らわれず、その背景にも目を向けて、より広い視野を与えたいと思います。そのためには私たち教員がこの四つの教育を体現しつつ子どもたちに関わっていききたいと思っています。

人と比べて自慢することも卑下することも、自己憐憫に陥る必要ありません。一人ひとりが唯一の存在であることをしっかりと信じ、目標をもって精一杯取り組むことが大事です。そこで何ができるか、何をしていくべきかを考えて進みましょう。そのような歩みに寄り添い、支援していききたいと考えています。

多くの視点から

教諭（小一担任） 澤邊 嵩介

一年生と一緒に過ごす新生活。あつという間に一カ月が経ちました。子ども達からは、学校に来るのが楽しいとか、給食が楽しみ、などのポジティブな声が聞こえてきています。ほっと一息つきながら五月も生活しています。

先日、算数の授業の中で『教室の中の数をさがそう』という活動をしました。「1」なら黒板が1つ、時計が1つ、テレビが1台……という風に、子ども達が見つけたものを次々に発表してもらおうという活動です。先生たちは「2」人とか、出席番号「4」番は〇〇君、ホワイトボード用のペンが「4」本あるなど、小1の子ども達はとても意欲的に教室の中の数を探していました。中には、「4」本のペンから1本取ったら「3」だとか、すい・よう・びは「5」文字だねというような、それまでになかったような発見もあり、皆で「ホントだ！」と友達の発見に盛り上がりました。

こうした活動を一つとっても、子ども達の着眼点というのは一人ひとり違うのだな、と改めて感じさせられます。こうした友だちの視点から、様々な見方や新しい価値観を得ることが出来るというのが、学校生活の良い所だと日々感じて生活しています。

このように、様々な視点での見方を知って、自分でも多角的な視点を持てるようになると、大きく二つの良いことがあります。

一つ目は、ポジティブな考えを持つことが出来るようになる、ということです。

コップに入っている半分の水を見て「もう半分しかない」と思う人もいれば、「まだ半分もある」と思う人もいます。これは経営学者のドラッガーさんが提唱した『コップの水理論』と言われるものです。心理学的な、認知療法の観点から見ると、こうした「まだ半分もある」というように、ポジティブに物事を捉えたとストレスを感じにくくなり健康的になる、といわれています。

二つ目は、何か問題が起こった時に、解決するためのヒントを見つけることが出来る、ということです。

私の好きな推理小説、コナン・ドイル著の『シャーロックホームズの冒険』の中でこういったセリフがあります。

「しかるに、視点をほんのすこしずらしてみると、そのおなじ証拠が、まったくおなじ揺るぎのなさで、それとは正反対のなにかを指し示しているとわかるんだ」

学校で、ケンカをした子ども達の話を聞く時に、このことをふと思ひ出します（少しセリフと意味は違いますが）。当事者の話、周りで見ている友達の話、その場に居合わせた他学年の人たちの話……同じケンカの話でも、視点によって見え方が変わってきます。

ケンカが起こった時に、どちらか片方の話だけで一面的に判断するのではなく、多くの視点から考えるようにすると見えてくるものが増えてきます。ケンカの原因となった事柄、ケンカした子ども達の気持ちの変遷やケンカのきっかけ、客観的に見たケンカの時系列等……。教員の方がケンカというものを多面的に見てあげて、当事者同士のそれぞれの視点からでは気づかなかったことを伝え、「そうだったんだ」「気づかなくてごめんね」といった言葉が出てきます。

このように、学校生活の中で子ども達と接する時には、多面的に物事を見ていくように日々心掛けています。特に、一年生は初めての学校生活なので、担任として多くの視点を持つて、安心して学校生活を送っていただけるようにサポートする必要があります。

幸いなことに、聖ステパノ学園では、担任二人体制での授業だけでなく、体育や音楽、聖書など専科の教員の授業を行い多くの目で子ども達を見守っています。それだけでなく、他の学年の教員や事務の方々、学校の先輩達、スクールカウンセラーや、時には校長先生等、多くの視点で子ども達を見守ることが出来ます。もちろん、保護者の皆様の視点も、子ども達の成長にとって大切な視点です。

こうした多くの視点を共有していただきながら、一年生とこの一年間、沢山のことを経験して楽しく学んでいきたいと思います。改めて、宜しくお願い致します。

All aboard!

教諭(中一担任) 露崎 志苑

それぞれの小学校での門出を終え、幾ばくかの期待感と緊張感で迎えた入学式から、早いものでひと月が過ぎようとしています。今年度はステパノ小学校を卒業した九名に、六名の仲間が加わり、十五名の仲間で新たな中学生活のスタートを切りました。どのような仲間ができるのか、いったいどのような学校生活が始まるのかと不安そうな表情で席についていました。春の陽気の中で氷が解けていったのでしょうか。今では新たな仲間とながり、少しずつ和やかな雰囲気の流れてきたように感じています。休み時間にそれまで話していなかった生徒同士が話しているのを見たり、楽しそうに話している声を耳にした瞬間が担任の私にとってはほっと嬉しい気持ちにさせられる瞬間です。

さて、担任を務めるにあたり、ステパノでの学校生活において中学一年生にどのようなことを大切にしてほしいかということを考えていました。その中で、「船」、「航海」というキーワードが浮かんできました。しばらくの間、船と教育に関わる活動をしていたことがあり、船乗りを目指す友人、遠洋に出かける船乗りや船長とお話をしたり、話を聞いたりしていたことがきっかけです。

船は一つの目的地を目指します。一度乗船すると目的地へ向けて船員一丸となって前に進みます。船員にも様々な役割があり、航路などを管理する航海士や、エンジンなどの機関を管理する機関士、甲板員や調理担当など、どの仕事も欠けてはならない大切な役割を担っています。

また、船上は集団生活です。一つの目的地を目指し進んでいくからには、制限された自由の中で、互いに自分の役割を果たさないとけません。船の上では一人あたりの水の量も限られており、起床や就寝する時間も決められた規則正しい生活を送るそうです。友人からは、この一見大変な集団生活の中で、成長(自立・自律)し、心のつながった最良の仲間ができたと聞きました。そして、「大変だったけど、何よりも楽しかった」と語っていました。

最後に、船はコントロールできない自然を相手にしています。船の上では二十四時間体制で天候や海の状況を観察します。万が一大きな波や嵐がやってきた場合には、冷静にその時にできることを行い、悪天候に向かい合っていかなければなりません。

クラスを「船」とするならば、中学校生活という「航海」においても、船上での生活のように、自分の役割を見つけ、それを担い、支え合う仲間、集団を作ってほしい。また、このステパノでの生活を通して、楽しみながら、困難なことにも向き合いながら、成長(自

立・自律)をしていってほしいという思いがあります。まるで出航した船のようにこのクラスで一丸となって前へ、前へと進んでいってほしいです。一年間、担任としてこのお手伝いをする事ができれば、とても嬉しく思います。

このような思いのもと、クラスのテーマを「All aboard!」としました。この言葉は、「全員が船に乗っている」ことを意味しています。が、文脈に応じて次のような意味になります。乗船していない人がいれば「All aboard! (皆様、ご乗船願います。)」(誰も置いていかないという思いを込めて)。また、出航する際のかけ声として「All aboard! (出発進行)」(クラス全員一丸となって進んでいくという思いを込めて)。

まずは、一年後に到着する先で、一人ひとりがどのような成長をしているのかを楽しみにしつつ、一年間、共に楽しみながら、共に成長しながら一生懸命担任を務めて参りたいと思います。



大好きなものを絵にかいて、クラスメイトの
知らなかった一面を見ることができました。

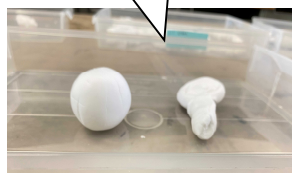
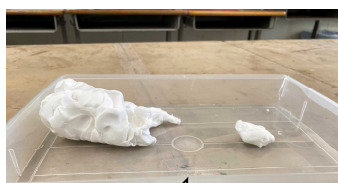


【図工①】

新しいこといっぱい
の「はじめて」をいくつか紹介します。

【小学校】
小学校では今年度、新たに十一名の児童
が入学しました。まだ身体よりも大きなピ
カピカのランドセルに身を包まれた一年生
のフレッシュな笑い声が、学園中に響きは
じめています。

「ボールとペロペロ
キャンディ…じゃ
なくてカタツムリ
のから」
K・T



「くるまど
かいじゅう」
Y・K

「フルーツケーキと
きびだんご」
A・Y



「ブーメラン」
T・N



【図工②】



えいよう まんてん！
えがお まんてん！！



【給食】



【算数—5をつくらう】

あかときいろのお花をくみあわせて…
5のまとまりを つくります。

〔中学校〕

今年度、中学校は十五名の新入生を迎えました。緊張した入学礼拝式から一カ月が経ちました。そんな新一年生が書いている日記から、また国語の授業で行った詩と俳句をご紹介します。

4月10日 月曜日

今日の朝、初めて定期券で電車に乗りました。ちゃんと「ピッ」と鳴って通れるかドキドキしました。人がたくさんいて、みんな速くて流れに乗れませんでした。でも勇気を出して行きました。うまくできました。安心しました。

学校に着くと友達が話しかけてくれてうれしかったです。帰りはT君と会ったので、一緒に帰りました。(T・T)

4月13日 木曜日



今日は部活の仮入部で陸上部に入りました。陸上部では最初にグラウンド8周と体操をしました。そして石ろうかを走ってタイムを測ったり、リレーもしました。休けいもありましたけど、ちよつときつかったです。それでも陸上部に入りたいと思っています。来週はサッカー部に仮入部に行こうと思いますが、今、陸上への愛はどこへ行つたと母に言われました。(I・N)

4月14日 金曜日

今日は新入生歓迎会でした。歓迎会の場所まで歩いて行きました。とても大変でしたが、友達とも話せたし、ヤギもいたし、とても楽しかったです。弁当を食べる時も先ばいと食べました。とても明るくて楽しかったです。遊びでは逃走中をやりました。スリリングで面白かったです。自分はハンターにつかまってしまいました。悲しかったけど、楽しかったです。(Y・T)

4月25日 火曜日

今日、1〜4時間目に体力テストがありました。中学では初です。小学校の時とは少しちがうなあと思つたところがありました。小学校の頃はソフトボールでしたが、中学ではハンドボールになりました。その後、一番きつかったのは持久走です。少し反省点に気付きました。最初、早く走りすぎて、後で少しダラダラになったので、もう少しがんばれたと思います。今日の記録よりも来年はがんばりたいです。(H・R)

4月26日 水曜日

今日は初めての週番で、朝は早く、帰りはおそくて週番は大変なんだと思いました。でもどんどん慣れないと大変だと思います。今日、みんなで七曲りをきれいにできてよかったなと思いました。

これからがんばりたいです。(G・T)

俳句から

花粉症 もうすぐあける よかったわ
(S・P)

春の風 セミは鳴かない 鳥は鳴く
(S・I)

桜餅 おいしい季節は 春ですよ
(H・S)

新入学 友達いっぱい できるかな
(K・T)

詩から

白い花
ひらひらと
ゆれながら
輝いている
(K・K)

桜がヒラヒラして
そしてそのとき
入学する
ぼくたち
(S・T)

新入生歓迎会
遠回りしたこと
で
たくさん景色
たくさん花虫
たくさん見れた
(K・L)





昨年より、本校の
理事長に就任された
森田利光先生にお話
を伺いました。

——聖公会の学校に長く関わってこられたと伺いました。

「私自身が、立教中学校から高等学校、立教大学を卒業し、母校である立教高等学校に英語科の教師として三十二年おりました。当時は、全国から集まる生徒達の学生寮があり、六万坪の敷地に三百人程の寮生が生活していました。私も寮の監督として住み、結婚後も家族と共に校宅で暮らし、よく働きましたね。夜中に車を運転して体調を崩した生徒を病院へ連れて行くなど、様々なことがありました。が、その中で培った教師と生徒との関係は特別なもので、今でも定期的に親しく集まる機会があり、良い関係性が続いています。」

部活動は、中学校から大学まで体操競技に取り組み、卒業後は教員として部の顧問となりました。体操は、床・あん馬・つり輪・跳馬・平行棒・鉄棒の六種目全てを行うため、鍛えられました。今も、週に二回はスポーツクラブへ通い、自転車や水泳の後にサウナと

お風呂で体調を整え、気分転換をしています。五十代中頃からは、同じ聖公会系列の香蘭女学校の校長を十二年間務めました。その後、二〇〇三年から本校とエリザベスサンダースホームに理事として関わることになりました」

——本校の印象、良いところはどのように感じておられますか。

「良いところがたくさん感じられ、惚れ込んでおります。創立者の澤田美喜さんのお考えと小川正夫先生（前理事長・前学園長）の二十五年に渡るご功績により、子ども達を大切に教育を伝えられ、ひとつひとつ丁寧に手作りの教育を実践していらっしゃる先生方の様子に感心しながら、理事として安心して見ております。計画的になされた環境整備も、小川先生への信頼と熱意に賛同された方々のご寄付に支えられてきたものと感じています。約二十年間、毎年卒業式に出席しています。が、礼拝は本校の児童生徒が一番上手ではないかと感じます。形だけでなく、自然に手が合わさっている姿を感じて見ております。また、ステパノだよりに全ての教職員が年初の抱負を書くことは、本校の特色でもあると思います。が、自然に聖書の言葉が引用され、児童生徒一人一人の持っているものをどのように引き出すか、楽しく有意義に学校生活を送るために何ができるかと考えるキリスト教の人間教育を実践されていると感じています」

凛々しさと気品あふれる柔らかな印象の森田理事長のお支えにも感謝を新たにしました。

STEPHEN'S NEWS

日本漢字能力検定

三級合格 中一 S・P

五級合格 中一 I・N

【編集後記】

今年は桜の時期も早々に終わり、学校は今青々しい新緑に包まれています。

五月号はそんな初々しくも瑞々しい新生特集号とし、担任の先生方の思いや、彼らの学校での日常をお届けいたしました。

小学校一年生は、毎日下駄箱近くの水槽を興味深そうに眺める姿や、芝生でお友達と楽しそうに遊ぶ姿、そして教室からは授業中の元気な声が毎日聞こえてきます。

中学校一年生は、委員会・部活・新入生歓迎会や体力テスト、中庭でバスケットボールを楽しむ中で、友達や先輩たちとの交流が深まってきました。学校生活にも慣れてきたように、元気で明るい笑顔がたくさん見られます。

これからも彼らの日々の成長を教職員一同見守って行きたいと思っています。（ひと）

発行者 聖ステパノ学園小学校・中学校

校長 佐藤 紀明

ステパノだより編集委員会

〒255-0003 神奈川県中郡大磯町大磯868

TEL 0463-61-1298

FAX 0463-61-9739

<http://www.stephen-oso.ed.jp>

二〇二三年五月十日（水）発行第276号